



ちょっとそこまで ~お散歩日和 (植物編)~



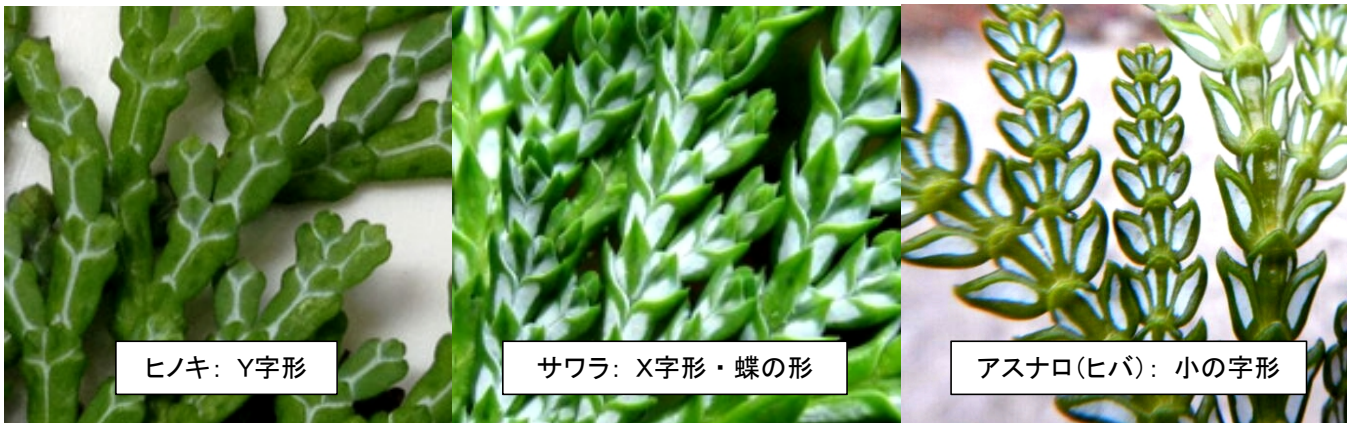
サワラ

「魚へんに春」と書いて「鱈 (サワラ)」なら、今日ここに紹介する樹木サワラは「木へんに春」と書くのかと思いきや、「椿」ではツバキになってしまいます。誰かが、「文化が成熟するとは、多様性を許容するカバリッジ (カバー率: あることが及ぶ範囲) が拡大するということである。」と定義付けていましたが、その意味で、こういう統一感のなさは文化の成熟度の高さの裏返しとも言えるでしょう。



当団地の針葉樹と言え、光が丘第十一保育園前の駐車場を囲むカイツカイブキと、5号棟南の通路出入り口のプランターにささやかに植えられたコニファーしか思い浮かびませんから貴重な存在です。と言っても、植栽箇所は、正確には団地敷地内ではありません。8・9号棟間の通路の、銀杏通り側入り口に2本立っています。植栽当初はほとんど同じ姿をしていたはずですが、現在は南側の樹勢に衰えを感じます。特にその枝先の縮れ具合の様子から、サワラではなくヒノキかと思ったほどです。日当たりとか栄養状況とか水はけとか、何らかの環境が影響しているのでしょうか、原因は分かりません。

改めて、ヒノキとサワラの違い、見分け方について触れておきましょう。最も簡便な方法は葉裏の白い気孔帯 (気孔腺) の模様を見れば一目瞭然です。ついでに、同じヒノキの仲間であるアスナロ (ヒバ) と3者を並べて比較してみます。



針葉樹の枝の裏面には、水分を蒸散させたり、ガス交換する気孔帯があり、白いワックスがついています。ヒノキの気孔帯は「Y字形」だと言われますが、どうでしょうか。それに対してサワラは、「Y」に対して「X字形」だと言われていますが、当団地に関しては、「蝶の形」と表現した方が良いでしょう。アスナロ (ヒバ) は「小」の字形と言えるでしょう。

まず、気孔の役割を復習してみます。気孔は植物におけるガス交換の場所です。体内からは気孔を通して外気中へ水分を蒸散します。従って、植物の水分バランスは気孔の開口度によって調節されていることとなります。また、気孔からはCO₂が流入して光合成に使われ、光合成の結果生じたO₂がやはり放出されます。以上のような気孔の役割を考えると、ここがワックスで覆われているということは、気孔腔が塞栓されているわけで、蒸散量が抑えられ乾燥条件下などでの水分の消費量を抑えられるということが一番考えられる利点ということになります。針葉樹の多くが冬でも葉を枯らさずにいられる、大きな理由と言えるでしょう。



これについては、小学校6年生理科で光合成の学習時に顕微鏡観察します。使用する植物は、表皮を薄く剥がししやすいことからムラサキツユクサが多いですが、ツユクサ、ムラサキゴテンの他、ネギやキャベツなど身近な野菜類もプレパラートを作成しやすい植物です。セメダインや水絆創膏、マニキュアなどを使ったレプリカ法を用いると、さらに広範な植物の気孔観察を楽しめます。

さて、サワラの名前の由来ですが、柔らかいことを意味する「さわらぎ」の略です。または、「さっぱりした(さはらか)」という言葉からきています。これは、成長が早いので、ヒノキと比べて柔らかい木質で、表面にも目立つような光沢はなく、外見的にも香りの意味でも、さっぱりとした癖のない印象を受ける木材だからです。したがって、建築用資材として、構造材には不向きとされています。

その一方、谷や川沿いなどに生育することもあって水に強く香りもほとんどないため、お櫃(ひつ)などの生活用品に利用されます。漢字に「榧(さわら)」を当てはめていますが、つくりの「甚」は、竈(かまど)に乗った甌(こしき)の図から生まれた象形文字です。その後、この甌が蒸籠(せいろ)へと移り変わったことから、その材料として使用されたサワラに用いたのではないかと推察します。

ついでに触れると、ヒノキは、古代に木を擦り合わせて火起こしに使われていたため、「火の木」に由来しています。漢字の「檜(ひのき)」ですが、このつくりの「會」も、「甚」同様に、竈(かまど)の上のつた甌(こしき)にフタをした象形文字です。土器の甌とフタが、ぴったりうまく「あう」の意味からできた文字です。ここでも共通点が多いことが分かります。

ここで、ちょっと気取って、島崎藤村の「夜明け前」の一節を引用しておきます。

檜木(ひのき)、榧(さわら)、明檜(あすなろ)、高野槇(こうやまき)、鼠子(ねずこ)——これを木曾では五木(ごぼく)という。そういう樹木の生長する森林の方はことに山も深い。この地方には巢山(すやま)、留山(とめやま)、明山(あきやま)の区別があつて、巢山と留山とは絶対に村民の立ち入ることを許されない森林地帯であり、明山のみが自由林とされていた。その明山でも、五木ばかりは許可なしに伐採することを禁じられていた。これは森林保護の精神より出たことは明らかで、木曾山を管理する尾張藩がそれほどこの地方から生まれて来る良い材木を重く視ていたのである。

日本の天然三大美林として「青森ヒバ・秋田スギ・木曾ヒノキ」が有名です。この中で、青森ヒバは中尊寺金色堂で、秋田スギは大館曲げ輪っばで、それぞれ個性を発揮していますが、木曾五木も尾張藩絡みで、歴史的な興味を大いにそそる存在であることを知って欲しかったのです。それに、その昔、馬込・妻籠宿から奈良井宿までを歩いて、強烈な感傷と感動を感じたことを少しでもお伝えしたかったからです。

こうした針葉樹は、美しい花を咲かせるわけでもなく、まして花粉症の大きな原因ともなっていますから、あまり興味がないという人も多いかもしれません。しかし、最近では、その小さな若木がコニファーとして重用されているので思いの外身近で、シンボルツリーとしても大きな存在感を放っているものです。コニファーとは、庭木として楽しまれている針葉樹の総称です。



最後に、林業への敬意と愛情に溢れた映画として「WOOD JOB」をお勧めして筆をおくこととします。これは、三浦しをん著「神去なあなあ日常」を原作に、矢口監督が紡ぎ出す青春映画です。是非一度ご視聴になってみてください。ちょっぴり前向きになれること間違いなしです。

